

先生のためのアウトリーチ ――音楽の喜びを伝えるアウトリーチの新しい形

山本 美紀（青山学院大学教育人間科学部 教授）

「アウトリーチ」という言葉が日本で盛んにいわれるようになって、30年ほどが経つ。当時はバブル期に競うように建てられた各地の音楽専用ホールや美術館をはじめ特色ある文化施設が、一部の愛好家のためだけのものだとして非難されることもあった。そのような中、「アウトリーチ（元々の意味は「手を伸ばして届く）」は、まさに文化施設から手を伸ばし、外の世界（地域）に施設の中で起こっている様々な文化活動を届けていくことを期待されたものだった。それが今では、各文化施設がアウトリーチ活動をはじめ、地域の文化活動や芸術文化の普及啓発活動に積極的に尽力し、大きな存在意義を示す根拠ともなっている。

日本で最初の音楽専用ホールとして1954年に誕生した神奈川県立音楽堂は、開館当初より地域の文化活動に関わってきた文化施設の一つであり、それまで培われた地域との関係性はコロナ禍を経て一層深められ、映像配信の導入などかえってその可能性は広げられたといえよう。2022年から対面実施が実現した「先生のためのアウトリーチ」は、より多くの子ども達に音楽の持つ力や素晴らしさを伝えるために、日々子ども達の目の前に立つ先生方にまず「アウトリーチ」しようとする試みであり、日本でも珍しい画期的なものだ。関連団体との打合せやアーティストへの橋渡しなどの様々な調整を経て、一方的ではない、細やかに教育現場のニーズに応えた内容となっている。今年度は夏2回と冬3回、合計5つの会場に先生方が集まり、打楽器（8/25、12/20 小学校教員）・声楽（8/28 中学校教員、1/30 小学校教員）・和楽器（箏）（1/16 小学校教員）のアウトリーチ活動が行われた。そのうちのいくつかをとりあげてみよう。

まず、打楽器は音楽専科ではない小学校の先生方を対象に行われた。「勤務校に音楽専科の先生がいらない」など集まった先生方の背景は色々だが、「打楽器奏法のみならず基本的な内容を学びたい」という要望があった。一方、音楽専科の中学校の先生方を対象とした声楽では、先生方は管楽器など様々な楽器の専門性を既にもった上で、中学校音楽科で求められる合唱を中心とした指導のために、今回のアウトリーチに参加された方が多かった。箏につ

いては、ほとんどが箏を触った経験のない小学校の先生方へのアウトリーチである。事前に寄せられた要望では「できるだけ箏に触れる時間をとって欲しい」「箏が一面しかない学校が多いので、それでもできる内容を教えて欲しい」など、和楽器の指導について、現場の切実な事情をふまえたアウトリーチへの期待感がうかがえた。いずれの会も、プロとして音楽の素晴らしさを伝えたいというアーティストの熱意、参加された先生方の真摯かつ積極的姿勢、また音楽堂スタッフのサポートによって、終始和やかでリラックスした雰囲気の中、プロの音楽に触れまた奏でる喜びに満ちた会であった。

ここで大切なことは、この活動が「アウトリーチ」であり、教員に施される「研修」という枠組みで収まるものではない、という点である。何よりも音楽の楽しさを、集まった先生方が実感して持ち帰ることが大切なのである。はじめ緊張気味に集まってこられた先生方が、アーティストの演奏を聴き、アーティスト自身から助言や勧めを受けながら実際に奏でていく内に、驚きから喜びへと表情が変わっていく様子は、これこそ音楽のもつ力であり、私たち人間が音楽を必要とする理由だと改めて確認させるものだった。この喜びを持ち帰った先生に指導される子どもたちは、何よりもまず音楽が楽しいものであることを知り、楽しいからこそ、自分の大切な表現手段として自らより深めていくことになるだろう。

学びの根源には、喜びが必要不可欠である。これからも「先生のためのアウトリーチ」が、アーティストから受け取った音楽の喜びを子どもたちと分かち合おうとする先生方のための大切な場として、一層成熟し活用されることを心から期待している。